

81. チンギス・カン霊廟の構造の解明を目指した考古学的研究

新潟大学人文社会科学系 教授 白石 典之

概要

モンゴル帝国の初代君主チンギス・カン（1162? -1227年）は、歴史上著名な人物である。しかし、有用な史料が限られているため、生活のようすや強大な権力を得た背景など、事績には不明な点が多い。そのようななか、モンゴル国アウラガ遺跡は、彼の本拠地跡として研究者から注目され、とくに彼を祀った霊廟跡からは、重要な資料が多数みついている。現在、霊廟跡には、地表に建物基壇（土台）が認められる。基壇は辺長 27 m、高さ 1 m の方墳状を呈する。基壇のほぼ中央には径 4m ほどの窪みがあった。事前の地中物理探査で、そこには堅坑状の遺構の存在が予想された。霊廟の成り立ちを知るため、本研究では窪み部分の発掘調査を実施した。発掘所見を踏まえ、この堅坑は地上から掘られたものではなく、地下に存在していた空洞が落盤を起こし、沈下したことでできたと理解した。その上で、空洞は墓室のようなものと想定した。しかし、その後のデータ解析の結果、この堅坑は地上から掘られたと明らかになった。その時期は、まだ建物の壁や屋根の残っていた 14 世紀末から 15 世紀と推定できた。堅坑を掘った人物は基壇を貴人の墓と考えたのであろう。今回の成果から判断して、ここが墓であるとは考えられない。残念ながら私たちの当初の想定も誤りであった。しかしながら、チンギス・カン霊廟というモンゴル帝国の重要施設の基礎構造を解明できたことは、重要な成果であると自負している。

背景および目的

モンゴル国中東部のヘンティー県デリゲルハーン郡にアウラガという遺跡がある。アウラガ遺跡は、チンギス・カンの拠点「ヘルレン河の大宮廷」という名で史料に登場する。いわばモンゴル帝国最初の首都である。遺跡の広さは東西約 1200m、南北約 500m のひろがりをもつ。

代表研究者は、2000 年度および 2008 年度に貴財団から受けた研究助成で、アウラガ遺跡の発掘調査をおこなった。その結果、遺跡のほぼ中心に位置する第 1 建物跡という辺長 27m、高さ 1m の基壇（方形マウンド状の土台）が、モンゴル帝国初代君主チンギス・カン（在位:1206-27 年）の霊廟であると明らかになった。

この霊廟では、羊や馬の骨付き肉に馬乳酒を振りかけながら焼き、煙を天に届ける「焼飯」という祭祀がおこなわれていた。とくにここでは、馬の肋骨や上腕骨といった皇帝級の人物にしか捧げない部位が、ふんだんに使用されていた。霊廟建物の造営とチンギス・カンの死去の時期とが近いことが、ここを彼の霊廟と確定する際の大きな根拠となった。

霊廟は、日干しレンガと土屋根でできた箱形の建物であった。チンギス・カンの死後、1220 年代末から 30 年代に建てられたが、一旦廃絶し、1290 年代に嵩上げされた基壇上に再建された。その後 1400 年代前半まで存続したらしい。最初の建物を「下部建物」、再建された建物を「上部建物」とよぶ。

最近になって第 1 建物跡で地中レーダ探査をおこなったところ、基壇の直下に性格不明の堅坑の存在が確認できた。堅坑は基壇のほぼ中央部からみついているので、ここに霊廟が建てられた背景に、堅坑が関連していたのはまちがいない。霊廟の構造の解明のために、堅坑の調査は不可欠であると考えた。そこで本課題では、モン

ゴル科学アカデミー考古学研究所と共同で竪坑を発掘し、構造と出土品の分析から、その機能を明らかにすることを目的とした。

方法

おもな調査方法は考古学的発掘である。発掘は、アウラガ遺跡の第1建物跡において、研究代表者（白石）と協同研究者の三宅俊彦、モンゴル側カウンターパートの科学アカデミー考古学研究所の研究員など、総勢12名が参加して、2023年8月23日から9月3日までの12日間で行われた。

第1建物跡には、二重の土壁で囲まれた基壇が残る。基壇の規模は、南北27m、東西22m、高さ1mであった。基壇の上にはチンギス・カンを祀る霊廟の建物があった。

この基壇の築盛過程についておおまかに概要を記しておく。まず、当時の地表面を平らに整地し、その整地面の上に版築工法によって土砂を積みあげて建物の基壇が造られた。つぎに基壇の上に「下部建物」が築かれた。やがて下部建物は崩壊し、瓦礫となって基壇の上に積もった。しばらくして、その瓦礫の上に、ふたたび版築工法によって土砂が盛られて基壇が嵩上げされ、「上部建物」が築かれた。だが、それも崩壊して瓦礫となり基壇の上に積もった。つまり、現状のような方形マウンド状の土台は、版築土と瓦礫が積み重なることでできたのである。

さて、私たちは基壇のほぼ中央にある、周囲に比べて若干窪んだ地点に関心を向けた。窪みは円形で径3mほどであった。ちょうどこの窪み部分からは、事前の地中レーダ探査で竪坑を思わせる異常値が確認されていた。そこで異常値が認められた付近を中心に、東西5m×南北6mの長方形の発掘区を設定した。発掘では、基壇の土がどのように堆積しているかを正確に把握するため、土層観察用の壁（ベルト）を残しながら、設定された範囲内を人力で丁寧に掘り下げた。

現在の地面より0.7～1.0m下に達すると、竪坑状の遺構の輪郭が明瞭に現れた。坑のプランは楕円形で、径は南北2.6m、東西は3.0mであった。

ベルトの土層を観察すると、調査区の東側では下部建物の基礎部分が60cm下へ沈んでいた。これに引きずられて、上部建物の壁や天井が崩落した土も沈下していた。また、調査区の北側では、地層に大きな亀裂が入り、基礎部分や建物の崩落した瓦礫が、深く沈み込んでいるようすが確認できた。

注目したのは調査区西側の土層の状態である。ここでは70cm四方大の加工された石が、地面近くの上層から1点、下層から1点の計2点検出された。形状からみて、それらは建物の柱礎石と考えられる。上の石は上部建物の礎石、下の石は下部建物の礎石にまちがいない。土層の沈み込みに沿って、斜めに傾いた状態で見つかった。上部建物の礎石は本来あった場所から30cmほど落ちていたが、下部建物の礎石は1mも落ち込んでいた。

こうした発掘所見から、この竪坑状遺構は後世の盗掘や攪乱ではなく、元々地下にあった空洞が崩落し、それによって地盤が沈下して形成されたものと結論づけた。どのような空洞があったのかは興味深いが、日程と予算の関係で現地調査はここで終了となった。

ただ、竪坑状遺構のなかに詰まっていた土（覆土）が、本来は堅く締まった版築土か、あるいは自然堆積土であるはずなのに、砂と粘土が混ざったやや軟質の黒色土であったことが気になった。そこで帰国後、発掘時に採集・記録したデータを詳細に分析したところ、発掘所見を訂正する必要があるが出てきた。

竪坑の覆土の年代を、出土した獣骨を使って放射性炭素14法により測定した。発掘所見の想定通りならば、13世紀第2四半期ぐらいの年代が出るはずであった。しかし、測定結果は1360-1388calAD (41.9%:IAAA-230643)と、おおむね14世紀後半という新しい値となった。おそらく上部建物の覆土が混入したと考えられる。つまり、この竪坑は、上部建物が廃絶した後に、基壇の上から掘り込まれたということになる。

そうした視点で、発掘区の土層を再検討してみると、地盤沈下で落ち込んだと考えられていた上部建物の壁や屋根の崩壊土は、地表から竪坑の中に入り込んだ流土であると判明した。また、竪坑の中から見つかった下部建物の礎石も、沈下で1mも落ち込むことは考えられず、竪坑を掘った人物が意図的に投げ入れたのではないかと解釈を変えた。ただし、上部建物の礎石は、盗掘後に放置された竪坑に、ずれ落ちたと考えてよい。また、竪坑の周囲の亀裂や沈降は、竪坑が埋め戻されずに長い間放置されたために起こったと考えられる。

堅坑覆土の最上位には、風成の細かい砂の層が堆積していた。これは隙間風の通る廃屋内でしばしばみられる堆積状況と似ている。それが確認できたということは、この堅坑も上部建物の壁が残っている時点で堆積したとみてよい。おそらく上部建物は14世紀末から15世紀に廃絶したと考えられるので、この堅坑もまた、そのころに掘られたと理解してよからう。

結果および考察

2023年度の三菱財団の事業報告では、発掘所見に基づいて、「アウラガ遺跡のチンギス・カン霊廟（第1建物跡）では、霊廟建物が築かれる前に、その場所には、すでに堅坑遺構が存在していた。それを覆うように、霊廟が築かれたとわかった。堅坑遺構が掘られたのは、おそらく1220年代であった」と結論づけた。

しかし、発掘所見の再検討、および理化学的年代測定の結果から、堅坑が掘られたのは、基壇上に建てられた上部建物が崩壊途中の14世紀末から15世紀であると結論を変更したい。おそらくこの堅坑遺構は、建物基壇を墓の墳丘と誤解し、遺体および副葬品の納められた墓室を目指して、盗掘者が掘削したものだと考えられる。

盗掘者がどのくらいの深さまで掘り込んだか明らかにできなかったが、今回の詳細な土層の観察から判断して、基壇の地下には墓室の存在を示す痕跡を見出すことはできなかった。第1建物跡は、チンギス・カンの霊廟であっても、墓ではなかったようである。

私たちの調査も、当初は墓室らしき空洞の存在を想定して始めた。その点では目的を達成することはできず、忸怩たる思いである。しかしながら、チンギス・カン霊廟というモンゴル帝国史上の重要施設の基礎的構造を細部にわたり解明できたことは、重要な成果であると自負している。こうした機会を与えてくださった三菱財団の各位に心より感謝の意を表して搁筆としたい。

(完)